

近代文学をどう読むか

中村光夫



新潮選書

我国の近代文学の誕生は西洋文学の影響による、と一口に言われますが、掘り下げて見れば十分な答えとは言えないでしょう。維新の変革がまず近代人を生み、彼らの要求に応じてまず西洋文学の翻訳が、ついで国産化した作品が出現したと見るべきでしょう。本書はこの過程を、できるだけ簡潔に分析して日本近代文学の特質にふれようとする試みです。

著者

近代文学をどう読むか

中村光夫

新潮選書

きんだいぶんがく
近代文学をどう読むか

〈新潮選書〉



© Mitsuo Nakamura, Printed in Japan, 1980

昭和五十五年十二月五日
昭和五十五年十二月十日
印刷
発行

定価八〇〇円

著者 中村光夫

発行者 佐藤亮一

印刷 株式会社金羊社

製本 植木製本株式会社

発行所 東京都新宿区矢来町七一
株式
会社 新潮社

郵便番号 一六二

電話業務部(03)二六六―五一一
編集部(03)二六六―五四二
振替 東京四一八〇八番

(乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付)
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

近代文学をどう読むか／目次

1	固有文化と輸入文化	7
2	幕末から維新へ	16
3	個人の自覚	27
4	功利と実用	37
5	文明への教育	49
6	封建道徳の解毒剤	60
7	無用の人の気品	69
8	大新聞と小新聞	79
9	「恋愛」ということば	88
10	新しい素材と古い手法	99
11	政治小説の限界	108
12	逍遙の役割	118
13	写真の主張	128

14	『小説神髓』の影響	140
15	二葉亭の存在意識	151
16	『浮雲』の「模写」	162
17	森鷗外の登場	173
18	自然主義の胎動	183
19	「想界」と「活世界」	193
20	『地獄の花』からの出発	201
21	文明開化の宗教	211
22	透谷とキリスト教	220
23	抱月と天溪	230
24	独歩の地位	241
25	私小説の誕生	251
26	文学の過去・現在	262
	あとがき	276

近代文学をどう読むか

1 固有文化と輸入文化

日本の近代化と文学についてお話ししようと思いますが、この問題は皆さんもご承知のように非常に大きな問題であると同時に、我々が誰しも自分の経験から納得している、いわば体験として意識している問題でもあります。ですから、単なる知識ではなく体験だといえるので、その点に問題のむずかしさと興味があるようにも思います。

そういう意味もあって、今回は特に文学を勉強しておられる若い人達、東京女子大の汐見令子さん、早稲田大学の半田久喜君、同じく早稲田の金井景子さん、この三人の方にずっと聞いてもらって、いろいろ疑問の点があれば質^たしてもらおうというつもりでおります。

日本の近代化と文学というテーマは、日本が近代化するにつれて文学がどういう風に変ったかとか、或いは近代化の中で文学がどういう役割を果たしたのだろうかというような問題を考えることなのです。そのためには、先ず、日本の近代化とは何だろうということ、近代化ということが我々にとってどういうものであったろうかということを考える必要があります。

一口に言えば、日本の場合、近代化というものは西洋化であると簡単に割切って考えてよいかと思えます。近代化ということは、ヨーロッパでもアメリカでも、またはその他の世界中の国々で言われてきたし言われている問題ですが、ヨーロッパやアメリカ合衆国のようないわゆる西洋の国々では、その国の固有の文化が爛熟してその中にあったいろいろな要素が発達して、近代が

生れたわけです。固有の文化がそのまま熟して近代を生んだということは、言い方はちょっと変ですが、近代文化は、良くも悪くも、彼らの身から出た錆と言えるのではないのでしょうか。

東洋の国々、またはアフリカでもどこでも、さっきの言い方を使えば、西洋以外の国では近代文化は輸入文化であるということが、一般にいえるわけで、日本の近代文化という問題は、この百年来異常な勢いで流入してきて日本全体を変えてしまった輸入文化にどういう風に対処したかという問題にもなるわけです。その点について、この輸入文化の激しい勢いというものが、曾てないような強い力を持っていて我々の生活を根こそぎ変えてしまったというような見方をする事ができますが、しかし、そういうものは案外何度もあったのを我々の方で気がつかないでいるだけではないかとも考えられます。

つまり、西洋の影響によって、国が大きな変貌をとげたこの百余年の間、我々が同じ日本の社会に生きて得た感触は、意外と同質のものではないかということなのです。我々がかつてなかった経験として味わったことは、百年前に僕らの曾祖父が経験したことで、形は違ってもほとんど同じことのくりかえしといってよいほど本質は似ているように思います。

たとえば、昭和二十年に僕らが味わった、敗戦と、連合軍による占領という事態は、日本の歴史が始まって以来かつてなかったことです。

しかしそれによって我々の社会生活あるいは精神生活におこった変化は、三百年間將軍様のお膝もとであることを誇ってきた江戸の市民が、ながい間仇敵視してきた雄藩の藩士たちによって遂行された改革にあたって経験したものとはほとんど同じだったのではないのでしょうか。

これらの「占領軍」はいずれも絶対の権威で市民に臨み、社会生活に新しい理念を樹立する使命感到燃え、そのために個人の内面にまで遡って要求をつきつけました。

明治維新の場合には廃藩置県（明治四年）というような日本を中央集権に作り上げようという

1 固有文化と輸入文化

改革が生れ、次に学制（明治五年）という西洋にならった日本の学校制度の整備ができ上り、第三には徴兵制度（徴兵令の布告明治六年）というもので身分の撤廃と近代軍の創設というような大事業が、無理矢理に行われたわけです。

占領軍の方を考えてみると、先ず、アメリカ軍の圧力で主としてできた新憲法の制定、だからどうというわけではありませんが、とにかくそれは事実でしょう、それから第二は、徴兵制度がなくなり、兵備の撤廃ということがとにかく名目上行われたことです。第三には、やっぱり学校制度が根本的な改革を受けたことです。

両者が武力を背景に実現を期したところが、社会生活における価値観、ひいては道德の革命であつたこともよく似ているし、それぞれが外国の文化あるいは文明を背後の権威として背負っていた点も共通しています。

双方ともはや旧い理念では生きられなくなった国家に、新しい世界に適合する資格をあたえることが、為政者にとっても、治められる国民にも急務として意識されたので、この協調あるいは馴れあいが、その上に築かれた社会の急速な繁栄と、眼につきにくい弱点の原因をなしています。

このような日本近代文化の特質は、それが多くの人の意識しない繰りかえしであるだけに、人がかりに学んで知らなくとも、それを事実上生きて、経験によって体得している筈です。

近代について考えることは、だからまず何より、自分がどう生きてきたかを、素直に顧みることです。日本の近代とは何か、という謎をとくのは自分とは何かという問題を追求することと同じです。あるいはその一部といってよいかも知れません。自分の上を省み、その可能性をさぐることといってもいいでしょう。要するに僕ら自身の生き方を考えて見ることと、それは切りはなせないのです。

近代について、我々はすでに多くのことを生活を通じて感じ、したがって知っているのです。だから近代について学ぶのは、これとは別に、種々の出来上ったこまかい——多くの場合、こまかすぎる——知識を外から持つてくるのではなく、自分の体験を整理して、これを外の現実とつなげ、この生きた接触を次第に過去にも拡げ、未来への展望をひきだすことです。

果してそううまく行くか、と言われそうですが、うまく行こうと行くまいと、我々の精神の呼吸する空間を拡大し、より自由に考える手段はほかにはないと思います。

この激しい改革の時代に生きる人間の何か人に言えない感情として夏目漱石（一八六七—一九一六）が「我々は過去を持たぬ成り上り者のように前へ前へと進んでいる」と、したがって我々には歴史がないというようなことをもらしております。これはいろいろな意味で大変面白い言葉だと思います。歴史がないということは、つまり我々が過去を忘れて未来を必死に追いかけているということになります。それは、そのように追いかけていないと、我々は未来の社会に置いてかれる、それではたまらないから、何とか他のことを省みる余裕を持たずにがんばろうということになるわけです。

漱石の言うのはその場合、我々のように輸入文化を一生懸命に追いかけていると、過去と同時に故国をも見失ってしまうことになってしまうのに、これは本当はつらいことである筈なのに、失った人は得意になっているというような皮肉が、ここに含まれているわけです。

同じような皮肉が、ドイツ人のベルツ（一八四九—一九一三）の日記にも見られます。ベルツという人は、ドイツ人の医者で、明治九年に日本に招かれて、東大医学部で、長い間教授して、多くの学生を教え、日本人の医療にも従事し、日本を愛し、後には、日本人と結婚した人です。この日本に好意を持っているヨーロッパ人が次のように日記に記しているのは面白いことです。

「——何と不思議なことには——現代の日本人は自分自身の過去については、もう何も知り

たぐはないのです、それどころか、教養ある人たちはそれを恥じてさえいます。「いや、何もかもすっかり野蛮なものでした〔言葉そのまま!〕とわたしに言明したものがあるかと思うと、またあるものは、わたしが日本の歴史について質問したとき、きつぱりと「われわれには歴史はありません、われわれの歴史は今からや、と、始まるのです」と断言しました。なかには、そんな質問に戸惑いの苦笑をうかべていましたが、わたしが本心から興味をもっていることに気がついて、ようやく態度を改めるものもありました」

(明治九年十月二十五日)

これは随分不思議な考えで、自分の過去を否定するということは、結局自分自身を否定することであり、日本に歴史がないということは、日本人そのものを否定することにもなり兼ねないことです。

ベルツが質問した人たちは、皆恐らく、非常に敏感な知識階級であり、そしてよく勉強して、自分の専門については少なくとも、まじめに考える人たちであつたと思います。

こういうように、自分を否定することから自分を犠牲にして何を得ることができるだろうか、このようなことをベルツは無言のうちに問うているようですが、これに対する答えは、現代でもある意味ではまだ出ていないかも知れません。

敗戦という苛酷な代償を払い、それから三十年経つても、そういう機運はほんの緒にいたかつかないかと、ひいき目にみても、いうほかはありません。

多くの人々は戦後ある意味ではさらに激しくなった時勢の変化に押されて、前へ前へと進んでいるだけで、それが自分にとって幸福なことか不幸なことか問いかける暇もないようです。

考えて見れば、これが日本の近代の一番大きな特色かも知れません。

もし「近代」という言葉で総括される社会体制や思想が、日本の社会のなかから生れてきたとしたら、つまり「近代」が固有な文化の発展として我々に与えられていたら、そこから生れる変

化がどれほど激しくとも、僕らの周囲にあるような事態はおこらなかったでしょう。後ろから追いたてる力がどんなに強くとも、人々の足が地から離れることはなかった筈です。

ところが、我国では近代とは思想から風俗まで輸入品でした。むろん近代の芽といえるようなものは、かなり熟しており、それを重く見ることは近頃の流行ですが、それらはただ近代思想をうけ入れる素地として役立つだけで、独自の力でそれを産みだすところまで行っていないのです。

したがって我国における「近代化」がまず「西洋化」という形で行われたのは当然ですが、その「西洋文明」の撰取あるいは移植が、物質的側面に偏って行われた結果、西洋文明の持つ古い歴史的性格は無視され、したがって、芸術、宗教などの分野もいずれかといえば閑却され、このような観点が、我国の過去についても適用されたために、人々の価値観に大きな偏差と断絶をもたらしました。

日本の近代文明について否定的なことばかり言ってきましたが、これは故意に日本文明に悪口を言おうとしているわけではないのです。

恐らく、日本人がヨーロッパ文明の非常にすぐれた物質的な力にぶつかって、そして何とかしてこれを自分のものにしようとして決意に燃えた時に、彼らは他のことを顧みる余裕はなかったわけです。

イギリスやフランスやドイツなどの軍艦が日本の沿海に迫って、砲門を江戸城に向けている時に、それ以外の何が考えられたでしょうか。つまり、列国に従属するか、それとも従属する代わりに日本人自ら、過去のいろいろな考えを捨てて——封建制度とともに漢文漢学等の中国的道徳を捨てて、過去の自分に全く否定的な態度をとって、そして新しいヨーロッパの科学というもの、の秩序に自分をほうりこむということをしなければならない時に、過去の歴史に価値がないと思

うのは、或る意味で、また、自然です。ベルツが内心嘲っているような考え方を、日本人に起させた責任は、実は他ならぬヨーロッパ人——西洋人にあるという言い方もできるのです。

そういうことを言っても、ヨーロッパ人は、別に責任を負ってくれるわけではありませんから、我々は我々でその問題を、これから考えていく必要があるわけです。

こういう考えは、もうちょっとニュアンスをかえると、福沢諭吉（一八三五—一九〇二）の考えにもなるわけです。

明治時代の開化というものを指導した精神には、やはり、物質的功利主義があったと言えますけれども、その根底には強い国家意識があり、独立ということを何より大切にしようという、言わば、武士的精神があったわけです。

外国の圧迫を被っているという意識が、その底にありました。そういうものが現在の日本では、ほとんどなくなってしまっていると言ってしまうのであります。そういうものがなくなって、後にはなにが残ったか。つまり、いろいろなものを捨ててしまった後で、我々に果してどういう価値が残されているかということ、これがひとつの大きな問題として、我々の前に残っているわけです。

〈質問〉

汐見 明治において、物質的な面では、確かに、自分の過去を否定するということがあったように思いますが、精神的な面においても、やっぱり全否定したのでしょうか。

中村 全否定というわけには、實際上、いかなかったでしょう。いわゆる「国粹派」と「文明派」の論争はながい間活潑に行われました。しかし時代の精神をリードしたのは「文明派」でしょうね。また、兵隊をとって、彼らに精神教育をする時には、忠君愛国とか、吹き込むわけ

です。そういうものは、否定しなかったでしようね。しかし、あれも考えてみると、便宜的に作ったものみたいなところがあって、本当の意味での価値とは、言えなかったのではないかな。半田 僕たちみたいな戦後の安定期に育った世代にとって、一番身近で具体的に感じる問題は、徳田秋声（一八七二～一九四三）のような自然主義なんです。それから較べると、先生の戦後と明治維新を重ね合わせながら見ていこうとなさる、その強烈なモチイフは、一体何だろうとつい考えてしまうのですが……。

中村 モチイフに強烈とか弱いとか、そういうことはないんじゃないかね。たとえば、秋声だって随分強烈な人ですね、同じことだと思ふけれど。

ただ、あなたのように安定期に育ったといっても、あなたの人生は、これから長いから、不安定期にはいることがあるかも知れないですよ。

あんまり安定期ばかり研究しておかない方がいいと思うんですが、安定期の研究を軽蔑するわけでは、決してありませんけど、二葉亭四迷（一八六四～一九〇九）なんかのことを僕はちょっと考えるんですが。

二葉亭と自分を較べるわけでは、もちろんないけど、二葉亭は、やっぱり自分が明治維新というものに、実際の人間の動きで触れているから、どうしても、政治とか、そういう直接な力というものを無視できない。だから、家賃を払って、町会費を納めていれば、一家は、安穩であるというような時代が、いつまでも続くとは、ちょっと思えない。これは、二葉亭でなく、勝手に僕が言うんですがね。

つまり、二葉亭の自然主義否定論に立つと、安定即永遠というような、自然主義みたいな考え方を、とれないんです。

だから、あなたのそういうものを実現してくれれば、僕は敬意を表します。冗談ではなく、